

# 横須賀水道道

六ツ川高等学校 矢野 慎 一

## 一 はじめに

今回、このような研究発表を行う端緒となったのは、数年前、筆者が藤沢市の自宅から前任校の金井高校（横浜市栄区）まで自転車で通勤していた時、藤沢市弥勒寺付近で不思議な直線道路の存在に気が付いたことである。周囲の街路と全く調和しない道路であり、さらにその道路は、J R 東海道線に突き当たったところで行き止まりになっている。まったく人や車が通行することを前提としていない道なのである。その後調査を進めていくと、弥勒寺付近には旧海軍の土地境界標石と横須賀市営水道の標石が数多く残されていることを知った。そして、この道路が横須賀水道道と呼ばれ、愛川町半原を水源とする横須賀軍港のための水道管用地であることが判明したのである。

本稿では、軍港水道の歴史と近代文化財・戦争遺跡としての水道施設の概要と水道の教材化、そして、神奈川県内に所在する直線道路の授業への活用について検討してみたい。

## 二、 神奈川における水道の歴史

近代以前の水道 近代以前の水道としては、小田原に北条用水（小田原用水）がある。この水道は後北条氏が建設したとされ、早川の水を小田原城内に取り込むためのものである。水道は江戸時代にも継承され、現在も箱根板橋周辺に遺構が残っている。

横須賀製鉄所の水道 近代に建設された水道として神奈川県で最も古いものは、横須賀製鉄所の水道であり、それが発展する形で整備・建設されたのが横須賀軍港の水道である。詳しくは後述する。

横浜水道 横浜市の水道はわが国初の近代水道として、一八八七（明治二〇）年一〇月一七日に給水が開始された。近代水道の定義は、河川などから取り入れた水を濾過（浄水）して、鉄管などを用いて有圧で給水（加圧配水）し、いつでも使うことのできる（常時配水）水道のことである。

戸数僅か八七戸ほどの寒村だった横浜は、日米修好通商条約に基づく開港場として、人口が急激に増加し市街は大きく発展した。当時横浜の住人たちは生活用水を求めて井戸を掘ったが、横浜は海を埋め立てて拡張してきたので良質な水に恵まれず、井戸水は塩分を含み、飲料水に適さなかった。このため、神奈川県知事は英国人技師ヘンリー・S・パーマーを顧問として招聘し、一八八五（明治一八）年水道建設に着手し、一八八七（明治二〇）年九月に完成した。その際に水源を相模川に求め、津久井郡三井村川井から横浜まで四三キロの水道管を敷設し、野毛山の浄水場（現貯水場）まで引水した。この水道管の上水道になり、現在では水道みち緑道として整備されている。

一八九〇（明治二三）年の水道条例制定に伴い、水道事業は市町村が経営することとなり、同年四月から横浜市に移管され市営として運営されるようになった。一八九七（明治三〇）年には、水源を山梨県道志村の道志川青山取水口に変更して、現在でも横浜市の水道水はここから来ている。

近代水道百選 一九八五（昭和六〇）年、厚生省（当時）の企画により歴史的価値の高い水道施設を後世に伝えるため近代水道百選を選定した。横浜市の水道施設では以下の三ヶ所が選ばれている。

◆旧三井用水取入口（一八八七年）

横浜水道創設時の取水口。道志川が相模川に合流する地点に二個の突堤で小湾口を設け、一日最大五、七二〇立方メートルの水を鉄管二条で揚水井に導き、そこからポンプで沈殿池に揚水していたもの。

◆旧青山取入口と沈殿池（一八九七年）

人口の増加に伴う創設水道の水不足に対処するために設けられた施設。道志川の水を取水して、沈殿池において普通沈殿処理を行った後に給水された。

◆城山隧道（一九一四年）

水道の拡張に伴い道志川から導水するために設けられた管路トンネル。四、三五八メートルの延長は、当時国鉄の笹子トンネルに次ぐもの。トンネルの内部には、わが国で初めて鍛接鋼管が使用された。

ヘンリー・S・パーマー 横浜水道を建設したヘンリー・S・パーマー（Henry Spencer Palmer）は、一八三八年四月三〇日イギリス領マドラス島に生まれた。一八七八（明治一）年一月、イギリス陸軍工兵隊の勤務として香港に赴任し、広東と香港の近代水道を設計、他にも土木事業に貢献した。一八八一（明治一四）年七月一日、工兵少佐に昇進し、天文、磁気、気象、潮汐等の観測所設置を提案したが財政上の理由により縮小された。一八八二（明治一五）

年一月一日、工兵中佐に昇進し、帰国を命ぜられた。一八八三（明治一六）年二月、帰国途中、東京に立ち寄った折りに横浜水道敷設計を依頼され、三カ月に及ぶ多摩川水源、相模川水源の実地調査のうえ報告書を提出して帰国した。一八八四（明治一七）年、日本政府は来日を申し入れ、一八八五（明治一八）年四月に再来日し横浜水道工事の技術顧問技師を勤めた。同年七月一日、少将に昇進したが陸軍を退官し、一八八七（明治二〇）年九月、日本初の近代水道を完成させた。並行して大阪水道、神戸水道、函館水道の工事調査を行い、兵庫県三笠村の灌漑工事も完成した。

一八八九（明治二二）年に横浜築港工事を監督、また横浜ドック会社の技師として活躍したが工事途中の一八九三（明治二六）年三月一日、東京にて死去し、青山外国人墓地に埋葬された。

パーマーのまとめた調査報告書は、百年以上経った現在でも水道関係者の手本となる緻密な作品であり、水道建設だけでなく都市近代化に尽くした偉業を讃え、野毛山公園に胸像が建てられた。

彼の主な作品は、横浜近代水道・横浜港・大阪近代水道・神戸近代水道・函館近代水道ほかである。

三、横須賀水道

横須賀鎮守府の歴史 横須賀軍港と鎮守府の歴史を簡単にたどってみよう。現在のアメリカ海軍横須賀基地及び海上自衛隊横須賀基地内には、明治の建軍以来、旧日本海軍が営々と築き上げてきた軍港施設の一部が今も各所に残されている。

そもそも横須賀軍港は、江戸幕府が一八六五（慶応元）年に工事を開始した横須賀製鉄所をその起源とする。横須賀製鉄所は、勘定奉行

小栗上野介忠順が計画し、フランス海軍技師フランソワ・レオンス・ヴェルニーを首長とする技師団によって建設された。しかし、明治維新による幕府の瓦解により、その施設は明治政府に引き継がれた。

一八七一（明治四）年横須賀造船所と改称し、一八八四（明治一七）年には当時日本で唯一だった横浜の東海鎮守府が横須賀へ移転して横須賀鎮守府となると造船所はその管轄となり、名称も横須賀海軍造船所と改められた。鎮守府創設に合わせて海軍施設の整備拡充が行われ、現在のJR横須賀線も一八八九（明治二二）年に開通した。これにより、沿線の返子や鎌倉には海軍士官のための住宅が建築されるようになった。

日露戦争前夜の海軍の大拡張により、一九〇三（明治三六）年には海軍工廠条例が発令され、造船所は船越の兵器廠と合わせて名称を横須賀海軍工廠と改めた。

横須賀鎮守府の担当海面は千島列島から紀伊半島までのまでの太平洋海域で、他の三鎮守府（佐世保・呉・舞鶴）と比べて最も広がった。また、横須賀軍港の内陸部にあった海軍工廠・海軍病院・海兵団・航空隊・海軍諸学校など全てを管掌する大きな権限を持っていたのである。

海軍工廠で建造された艦船は、一八八九年から一九四五年までの七五年間で、二〇〇隻以上（排水量一〇〇トン以上）を数える。主なものとして、戦艦「陸奥」「比叡」、航空母艦「飛龍」「翔鶴」「信濃」、巡洋艦「妙高」「高雄」、伊号第二九潜水艦などがある。

次に、今も基地内に残る戦争遺跡を簡単にみてみよう。まず、現在海上自衛隊横須賀地方隊の田戸台分庁舎として使用されている、旧横須賀鎮守府長官官舎がある。これは一九一三（大正二）年に当

時横須賀鎮守府施設部長だった桜井小太郎（一八七〇～一九五三）によって設計・建設された。桜井は一八九〇（明治二三）年ロンドン大学建築学科を卒業し、日本人として初めて英国公認建築士の称号を得た人物である。海軍時代の主な作品は、呉鎮守府長官官舎（一八八九年建設・現呉市入船山記念館）、大湊要港部軍用水道堰堤（一九〇九年建設）などがあり、舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫（一九〇三年建設・現舞鶴市立赤れんが博物館）の設計にも関わっている。だが、一般には海軍退官後に設計した丸の内ビルディング（一九二三年建設）が、彼の代表作として有名である。

それから、アメリカ海軍第七艦隊司令部の建物は、旧横須賀鎮守府庁舎であり、一九二四（大正一三）年に建設されたものである。

このほか基地内には、現在も使用可能な船渠（ドライドック）が三つある。船渠とは、船の建造・修理を行う施設であるが、付帯設備として、ガントリークレーン、スチームハンマーなどがあった。ガントリークレーンは近年取り壊されたが、スチームハンマーは艦船修理部で、幕末にフランスから輸入された六基のうち二基が一九九七年まで稼働していた（現在、横須賀臨海公園のヴェルニー記念館で復元・展示されている）。三笠公園の記念艦三笠や工廠正門の衛兵詰所（臨海公園に移築）なども忘れてはいけない。

フランソワ・レオンス・ヴェルニー 横須賀軍港の基礎を築いたフランソワ・レオンス・ヴェルニー (Verny, Francois Leonce) は、一八三七（二月二日）フランス、アルデシユ県オプナに生まれた。一八五四年リヨンの国立高等中学校を卒業後、一八五六年エコー・ポリテクニク（理工科学校、パリ）に入學し、抜群の成績で

同校を卒業した。一八五八年フランス海軍造船大学に入学した。二三歳の時に造船大学を卒業。二五歳の時、二等造船技師の資格を取得し、フランス海軍造船官となる。プレスト海軍工廠で船舶の修理などを担当し、その後フランス海軍から派遣されて中国で軍艦建造に従事した。

一八六五（慶応元）年二月、江戸幕府から招かれて来日し、一八六五年九月一日（慶応元年七月一二日）には、お雇外国人として雇用された。同年横須賀製鉄所・造船所の設立原案作成を指導した。一月二五日（新暦九月二七日）に横須賀製鉄所の鉄入式が挙行された（この一月二五日は横須賀開港記念日である）。一八六七年四月七日（慶応三年三月三日）横須賀造船所ドック着工。一八六六（慶応二）年六月に再来日。横須賀に着任して、横須賀製鉄所建設を監督するとともに、横須賀製鉄所首長となる。一八六八年一月一日（明治元年八月三〇日）には日本初の西洋式灯台「観音埼燈」（観音埼灯台）を起工（一月一日は灯台記念日である）。一八六九年二月一日（明治二年一月一日）観音埼燈臺初点灯。これに続き野島崎、品川、城ヶ島の各燈臺（灯台）を建設した。これらの灯台では横須賀製鉄所内（ヨコスカ製鉄所）で製造された煉瓦を使用している。一八七一年三月二八日（明治四年二月八日）横須賀造船所開業。横須賀丸、横浜丸（後に弘明丸）、蒼竜丸など一〇数隻の建造を指導した。一八七六（明治九）年には、走水水源地を開発した（横須賀水道最初の水源）。一八七六（明治九）年三月一三日横浜からフランス船「タナイス」号で帰国した。帰国後はプレストで海軍関係業務に従事した。一八七七（明治一〇）年一月二三日勲二等旭日重光章を受章。一九〇八（明治四二）年五月二日、オプナで死去。

享年七一歳であった。

一九五二（昭和二七）年、横須賀市が横須賀製鉄所建設に功績のあった小栗上野介忠順とヴェルニーを顕彰するための式典を開催した。以来、毎年一月に二人の像の前で式典が行われている。

横須賀製鉄所（造船所）の水道 横須賀造船所の稼働率が高くなつてくると、その用水を確保するため、ヴェルニーは走水の多量の湧水に目をつけ、これを造船所まで引こうとした。水源地から造船所まで距離は約七、〇〇〇メートルだったが、測量の結果、高低差はわずか一〇メートルほどしかなかった。そこで効率よく水道管をひくため途中四ヶ所にトンネルを掘り、一八七六（明治九）年二月に工事は完成した。これが横須賀の水道の始まりである。

#### ◆走水水源地

一九〇二（明治三五）年に完成した市内唯一の水源地である。元来、走水は水の豊富な土地で、走水の湧水を水源として、横須賀造船所のヴェルニーにより、一八七六（明治九）年に走水から造船所まで約七、〇〇〇メートルの間を直径一二・五センチ、長さ一〇〇センチの管をつなぎ合わせて水道が引かれた。当初は、軍港用だったが、横須賀の人口増加による水不足で、一九〇六（明治三九）年には走水から水道を分ける工事が完成した。一九〇八（明治四二）年には別の湧水を水源とする水道施設も完成した。現在も一日約二、〇〇〇トンの湧水があり、市民の水道用水として活用されている。また、約五〇年前に植えられた桜並木があるが、従来水道用水の水質汚染を防ぐため一般には公開されていなかったが、今春より桜の開花時期に合

わけて、敷地の一部を開放することになった。

横須賀軍港水道と横須賀市営水道 横須賀市の水道は、造船所の必要に応じて整備された軍用水道が始まりである。ヴェルニーの発案で走水の湧水を造船所までひいた水道は良く知られるところで、一八七六（明治九）年に完成した。

さらに日露戦争後の横須賀軍港と横須賀海軍工廠の大規模な拡充に対応して、一九一二（明治四五）年から一〇年かけて、愛川町の半原水源地から横須賀の逸見まで、神奈川県を斜めに横切る形で新たな水道管が敷設された。

この水道の特徴は、五三キロもの距離をポンプなどの人為的な力を用いず、水が自然に流れるのに任せていることである。その理由は、半原と逸見との高低差七〇メートルを利用しているのである。水道管は、山や川、畑などをまったく無視して、真っすぐに通した。そのため、トンネルが一二ヶ所、橋は一〇本もある。

現在でも家屋や工場が、水道管を避けて建っており、「水道道」と呼ばれるのはこのためである。所々に標石が立てられ、水道管が埋設していることを示している。流れる水の速さは、大人がゆっくり歩くぐらいで、およそ一日かけて半原から逸見まで流れてくる。水道道の経路は、愛川町↓厚木市↓海老名市↓綾瀬市↓藤沢市↓鎌倉市↓逗子市↓横須賀市である。

一方横須賀市の場合、横須賀軍港の発展に伴って人口が増大し、また、市街地が埋め立て地に形成されたため井戸も掘れず、次第に水不足が深刻になってきた。当時は、市内を「水売り」が歩くほどであった。

市ではこの問題を解決するため、海軍が走水系統の水道管を新しくしたのを機に、古くなった水道管を払い下げてもらうこととした。走水の湧水を水源として市営水道を建設し、一九〇八（明治四一）年一月二五日から若松町・大滝町・小川町に給水を始めた。これが市営水道の始まりであるが、当時の水道使用者はわずか三三三戸だった。本格的な上水道の整備は大正時代になってからである。

市内に大きな水源がない横須賀市では、相模川や酒匂川など以下の六つの水源系統から水をひいている。

- ① 県中央部を流れる相模川を水源とする有馬系統と小雀系統
- ② その支流の中津川を水源とする半原系統と宮ヶ瀬系統
- ③ 県西部の酒匂川を水源とする酒匂川系統
- ④ 市内唯一の水源である走水系統

そのうちの半原系統が、軍港水道のことである。半原系統の主な施設は次の通りである。

#### ◆半原取入口（愛甲郡愛川町）

相模川の支流である中津川から、一日一〇、〇〇〇立方メートルの水を取り入れ、半原水源地へ送っている。

#### ◆半原水源地（愛甲郡愛川町）

半原取入口から約五〇〇メートルの地点にあり、半原取入口からの水を受け入れ、沈殿処理したうえで、横須賀市内の逸見浄水場へ送っている。

#### ◆逸見浄水場（横須賀市西逸見町）

横須賀市内にある唯一の浄水場である。半原水源地から送られてくる水を浄水しており、一日一〇、〇〇〇立方メートルの浄水能力がある。

#### 四、その他の軍港水道

呉鎮守府の水道施設 一八八八（明治二二）年二月に着工され、翌一八八九（明治二二）年九月に竣工した。現在もそのままの姿で残っているのは、宮原配水池と本庄水源地堰堤である。

#### ◆宮原配水池（現、呉市水道局宮原浄水場低区配水池）

構造は、煉瓦造りの上屋式配水池で、建築年代は、一八九〇（明治二三）年。煉瓦造りの配水池としては日本最古のものである。

#### ◆本庄水源地堰堤

一九一八（大正七）年に呉鎮守府軍用水道の貯水池として、築造されたこの施設は、長さが九七メートル、高さが二五メートルで、当時としては東洋一の規模を誇っていた。一九九九（平成一一）年五月二三日に、稼働している水道施設としては全国初の国重要文化財に指定された。堰堤表面は、花崗岩の切石が丹念に築かれ、重厚で美しい外観をなしている。

ウィリアム・キンバートン 呉鎮守府の水道施設建設に貢献したウィリアム・キンバートン（William Kinimond Burton）は、一八五五年五月一日スコットランド、エディンバラに生まれた。

一八八四（明治一七）年、ロンドンで開催された万国衛生博覧会に参加した内務省衛生局長永井久一郎（永井荷風の父）の要請により、一八八七（明治二〇）年五月来日し、工科大学の衛生工学担当講師となり、また内務省衛生局顧問技師として横浜市水道の改修、名古屋市、広島市、門司市等の各地の水道改良に尽力した。また、パーマーの調査・設計した大阪水道工事計画に改良のための意見を

述べ、その計画が修正されるに到った。

一八八八（明治二二）年八月、東京市区改正条例公布に当たり、委員に任命された。同年一〇月、上下水道設計調査委員会が組織され、その取調主任となった。

一八八九（明治二二）年、日本写真会を設立し、J・Jコンドル設計のニコライ堂の建設風景などの貴重な写真を残しただけでなく、欧州からの写真用品の輸入、解説本『写真術のABC』の執筆など、日本の写真技術の発展に貢献した。一八九一（明治二四）年には濃尾地震の被害状況を視察、撮影し、一八九六（明治二九）年五月、帝国大学を満期退任、勲四等旭日中綬章が贈られた。

後藤新平が台湾総督府民政局長となり、バートンは招かれて台湾に渡った。台北市の下水道工事もバートンの努力により進み、さらに基隆港水道工事に着手したが、健康を害したため日本に戻った。

一八九九（明治三二）年八月五日、肝臓疾患のため死去し、青山霊園一般墓地に埋葬された。

彼の主な作品は、凌雲閣（現存せず）、東京近代上下水道、名古屋近代上下道、牛田浄水場、呉鎮守府宮原浄水場、呉鎮守府平原浄水場、三野水源地、台北水源地、などである。

佐世保鎮守府の水道施設 佐世保鎮守府の水道施設遺構として、現在も残っているものは、堺木峠減圧井である。

#### ◆堺木峠減圧井

減圧井は送水管の破裂を防ぐため、水圧の調整を行う施設である。佐世保鎮守府は水源拡充のため、当時の北松浦郡皆瀬村（現在の十文野町）にあった湧水の溜池を改良することを計画

し、岡本貯水池を一八九九（明治三二）年三月に起工、翌年五月に竣工した。時を前後して、同貯水池の源水を浄化するための施設（旧矢岳浄水場）を一八九八（明治三二）年一〇月に着工し両方を八インチ（二〇センチ強）鉄管で結んだ。しかし両方の高低差が一四メートルもあり水圧が高すぎることから、水圧の調整を行う減圧井を「堺木」と「野中」に設けた。この建物は、赤煉瓦造りで屋根は日本瓦葺、和洋折衷の様式である。旧矢岳浄水場が竣工した一九〇一（明治三四）年頃完成したとされる。現在は使用されていないが、当時を偲ぶ貴重な施設である。

**舞鶴鎮守府の水道施設** 舞鶴鎮守府開庁に向けて、艦艇用補給水を確保するため、水源地を与保呂川上流に求め、一九〇〇（明治三三）年九月に桂貯水池が完成した。翌年一〇月に北吸の高台に浄水場及び配水池（容量二、四〇〇立方メートル）が完成し、同一一月から給水を開始した。

その後の軍備拡張にもなつて一九一七（大正六）年二月から一九二一（大正一〇）年六月に北吸浄水場と岸谷貯水池の拡張工事を行っている。敗戦に伴い一九四五（昭和二〇）年一〇月から、舞鶴市が軍用水道の全施設を管理運営している。現在も軍港水道時代の遺構が数多く残されている。

#### ◆桂貯水池

建築年代は一九〇〇（明治三三）年である。堰堤は石張コンクリート造で、高さ二二・四メートル、天端幅二・二メートル、堰堤延長四三・六メートル、貯水量八、〇〇〇立方メートル

（当初六、〇〇〇）の小さな貯水池である。一九八五（昭和六〇）年五月には近代水道百選に選ばれた。京都府指定文化財。

#### ◆岸谷貯水池

一九一七（大正六）年、軍港拡張の機運が高まり、水源地の増強も計画された。岸谷貯水池は、一九二一（大正一〇）年六月に完成し、岸谷川下流に岸谷川を横断する容量二万立方メートルの土堰堤（高さ三〇メートル、天端幅七・六メートル、延長一四八メートル）や放水路等が築造された。

#### ◆北吸浄水場第一・第二配水池

北吸浄水場配水池は、一九〇一（明治三四）年建設の当初一池（容量二、四〇〇立方メートル）であったが、その後一九二一（大正一〇）年六月に、北吸浄水場の拡張工事を行い配水池を一池（容量二、四六〇立方メートル）増設した。敗戦に伴い一九四五（昭和二〇）年一〇月から、市の管理となったが、一九六四（昭和三九）年一月に廃止される。まで六五年間稼働した。この配水池本体はコンクリート造であり、向かって右側の第一配水池の内側は石張りとなっているが、左側の第二配水池には石張りは見られない。ともに導水壁は五列で煉瓦造となっている。また、配水池上屋はともに煉瓦造で、一九二五（大正一五）年に建てられ、屋根は鉄骨トラス組でトタン葺である。正面中央入口は、上部にアーチを施したロマネスク風の洒落たデザインになっている。

#### ◆桂貯水池堰堤

舞鶴鎮守府の軍用水道施設として一九〇〇（明治三三）年に築造され、翌年、鎮守府開庁と同時に通水を開始した。コンク

リート造では国内でも初期の例であり、水門や放流部には煉瓦を用いるなどデザインにも優れ、近代土木技術史上貴重な建造物である。築造から今年で一〇一年目を迎えるが、現在も舞鶴市の水道施設の一部として使用されており、京都府指定有形文化財（建造物）に指定された。

**大湊要港部の水道施設** 大湊要港部の軍用水道水源地堰堤が現在も残っている。建築年代は一九〇九（明治四二）年である。設計は横須賀鎮守府の施設部長だった桜井小太郎である

大湊要港部水道施設の中心をなすものであり、一九四六（昭和二一）年からは大湊町に引き継がれ、一九七六（昭和五一）年まで使用されていた。釜臥山を源流とする宇田川を堰き止めるもので、堤高七・九メートル、堤長二六・五メートルという小規模なものながら、日本で初めて試みられた厚アーチ式石造堰堤である。躯体に設けられた四口の溢水口は美しい櫛型アーチで構成され、そこから水の流れ落ちる光景は格別のものがある。わが国最初のアーチ式ダムで、表面は安山岩間知石の布積みである。石工は九州から招かれたという。

## 五、まとめ

**水道施設** 近代化遺産や近代文化財としての水道施設については、日本史の横浜開港期の授業での活用が期待される。さらに、横須賀軍港に関連して、戦争遺跡の視点を取り込むことで、より幅広い展開ができる。また横浜市内や横須賀市内だけでなく、それぞれの水道道に沿った地域の学校でも教材化として利用が可能だと思ふ。

**直線道路** 各地には様々な直線道路があるが、それぞれ歴史的な経緯をもつものである。生徒に地図上の直線道路を探させ、その道路のもつ意味を考えさせたり、調べさせたりすることができる。神奈川県内のもを中心にいくつかの事例を紹介しよう。

### ①道として作られた道

○古代の官道跡

○中世の鎌倉街道・鎌倉道

○武田信玄の棒道

○現代の国道・高速道路・新幹線

○土地区画事業 古代の都城（藤原京・平城京・平安京）・奈良制・鎌倉の都市計画・幕末開港場の居留地・屯田兵村・新興住宅地開発（東京田園調布・大船田園・大和中央林間）・都市再開発・圃場整備・震災復興・戦災復興

○軍用道路 横浜市瀬谷区の海軍道路

### ②道以外のものが道になった道

○水道道→水道管用地 横須賀水道道・横浜水道道

○鉄道廃線跡 寒川町一之宮緑道

○パイプライン→米軍基地へ燃料輸送のためのパイプライン

○飛行場跡→戦争末期に海軍が建設した本土決戦用航空基地

三浦市初声町・横須賀市長井・藤沢市本藤沢

○軍事施設跡（軍工廠跡） 第二海軍火薬廠（平塚市大原）・大

船海軍燃料廠（横浜市栄区柏陽）

○横浜居留地射撃場跡（鉄砲場） 横浜市中区大和町（山手駅

前商店街通り）